

渋沢敬三の自然観—魚名研究とその学史的意義—

安室 知（日本常民文化研究所）

研究者としての渋沢敬三の自然観を象徴する言葉を一つあげるとすれば、それは「同定 (identification)」においてほかにない。しかもそれは渋沢の学問観を示す言葉ともなっており、ひいては1930年代、日本の民俗学が柳田国男により近代学問として整備されようとするとき、その方向性に大きな軌道修正を迫るものとなった。その言葉が頻繁に用いられるのが、渋沢の代表的著作『日本魚名の研究』(1959)である。その著作は、もとは戦前に編集された『日本魚名集覧』(1942-1944)の第3部(1部：辞典、2部：索引、3部：考察)として著されたものである。

渋沢は魚名研究に着手する以前から、柳田民俗学については以下のような疑問を呈していた。「自分等が特殊の敬愛と愛情とを持つ民俗学に、今まで生物学的とでも云いたいような実証的研究法があまり用いられておらぬことをいささか不満に思っていた」(渋沢 1933)。そして、自身による魚名研究の成果として刊行した『日本魚名集覧』においては、その冒頭で、「方言学者の手に成る大部分の研究資料は魚種の認定が困難なる場合多く、殆んど全部割愛してしまった」と直裁に述べている(渋沢 1942)。当時、柳田自身が『蝸牛考』(初版1930年、改訂版1943年)の改訂に際して、自らの研究を民俗学ではなく方言学の成果と位置づけていたことを考えると、渋沢のこの言葉は痛烈な民俗学批判となっている。

渋沢は『日本魚名集覧』を編纂するに当たって、「引用書は大部分魚類学者水産学者の手になるもの」(渋沢 1942)を旨とした。そのため、民俗学者・方言学者の聞き取り資料を用いる時には、必ず調査時点において魚の同定にあたらせた。たとえば、当時アチックの同人であった宮本常一は魚名調査に出かけるとき渋沢の指示により魚類図鑑(田中 1929)を調査地に持参した(田村 2011)。そして、現地から渋沢のもとへ調査報告を送る時には、現地で採集した魚名には必ず魚類図鑑の図版番号を記して、魚種が同定できるようにしている。さらにいえば、渋沢は魚名研究のために「魚類の実物標本」の収集も積極的におこなっている(渋沢 1942)。

また、魚名の整理段階において、渋沢は自身で整理票(日本列島の輪郭が記された白地図)を準備して臨んでいるが、そこには標準和名とともに必ずラテン語で学名が併記されている。その上で、魚の地方名が地名とともに列記される。さらに、興味深い点として、整理票のいくつかには、魚の図(スケッチ)が添えられている。渋沢自身が色鉛筆を用いて描いたものである。魚類図鑑の図を模写したものに混じって、実際に魚市場等で観察した魚のスケッチもある。それを見ると、渋沢が魚類を同定するうえで、鰭棘(魚類の鰭の支柱部)と体色(模様)を重視していたことが分かる。こうしたことにも渋沢は魚名の分類整理の段階から生物分類の体系(目—科—属—種)を重視していたことが窺われる。

こうした渋沢による魚名研究は柳田国男による『蝸牛考』の改訂作業とほぼ並行しておこなわれており、『日本魚名集覧』第1部が刊行されるのは、改訂版が出版される1年前のことであった。その結果、柳田は『蝸牛考』の改訂版から「蝸牛異称分布図」(初版に掲載)を削除し、周圏論の民俗学における一般理論化を諦めざるをえなかった。その後、柳田は蝸牛ではなく、蜻蛉の名称を用いて周圏論を展開する(柳田 1947)が、それは方言学の理論として提出したものにすぎなかった。そして、それを最後に、戦後はたとえ民俗分布図の上で「遠方の一致」が見いだせても、それを周圏論で解説することはいっさいなくなった。